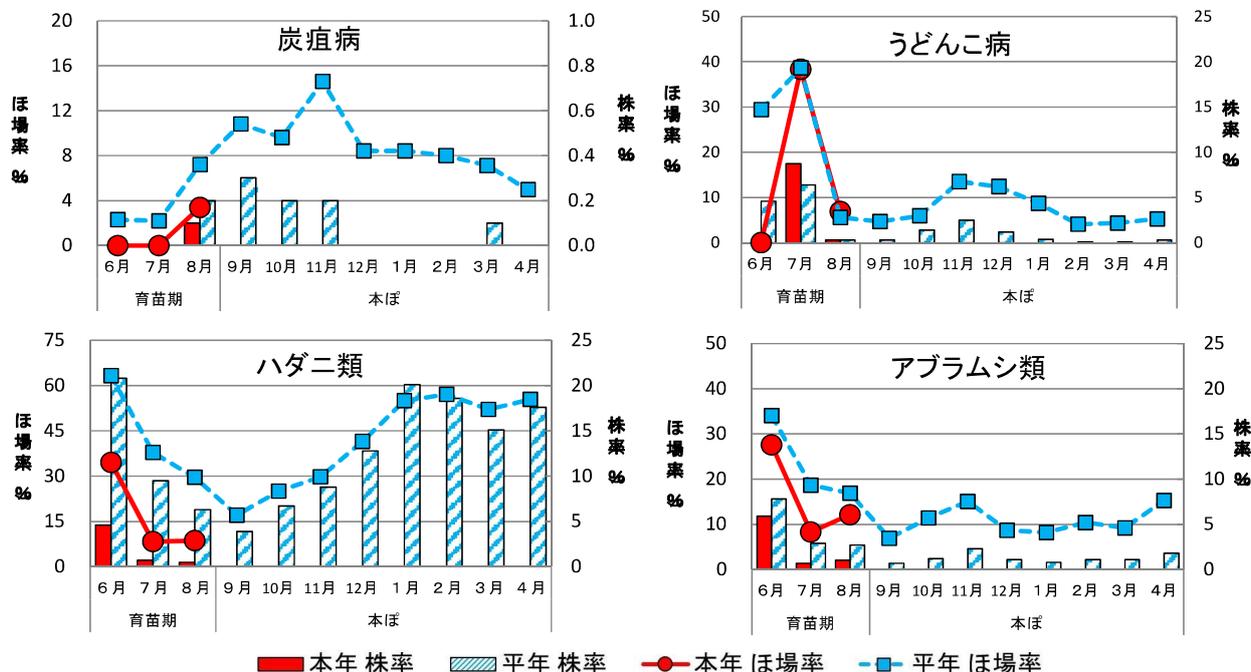


■ 病害虫の発生状況（親株床・育苗）

- ・炭疽病の発生はやや少なく、うどんこ病の発生は平年並です。
- ・ハダニ類の発生はやや少なく、アブラムシの発生は平年並です。



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 主な病害虫の発生予想と防除対策

1 炭疽病

- (1) 発生予想 ・発生量：平年並
- (2) 対策
- ・植物体の濡れ時間が長いと感染・発病が助長されるので、かん水は午前中に行い、夕方には地上部が乾いた状態になるよう水量を調整する。
 - ・発病してからの防除は困難なので、予防を主体に異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
 - ・発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
 - ・[植物防疫ニュース\(速報No.9\)](#)、[炭疽病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

2 うどんこ病

- (1) 発生予想 ・発生量：平年並
- (2) 対策
- ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適切な栽培管理やかん水を行う。
 - ・予防を主体に薬剤散布を行う。

3 ハダニ類

- (1) 発生予想 ・発生量：平年並
- (2) 対策
- ・定植前に徹底した防除を行い、本ぼへの持込みを防ぐ。
 - ・薬剤抵抗性の発達を抑制するため、気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。化学農薬を使用する場合は、系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
 - ・雑草はハダニ類の発生・増殖源となるため、ほ場内外を除草する。

4 アブラムシ類

- (1) 発生予想 ・発生量：平年並
- (2) 対策
- ・発生初期から系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
 - ・雑草はアブラムシ類の発生・増殖源になるので、ほ場内外を除草する。

■ 今月のトピックス 萎黄病について

- ・ 萎黄病に感染すると、葉の奇形（図1）、株の萎縮や黄化（図2）、クラウン内部の導管の褐変（図3）、根部の褐変（図4）等の症状が現れる。高温期に感染及び発病しやすいが、盛夏期には症状が不明瞭になることがある。
- ・ 土中に残った胞子が伝染源となり、根から侵入して導管を侵し感染発病する。また感染親株からランナーを通じて子苗にも伝染する（図5）。畝に沿って発生することがある（図6、図7）。
- ・ 発病してからの防除は困難なので、予防を主体に防除対策を実施する。ほ場を注意深く観察し、発病株や感染が疑われる株は見つけ次第取り除き、ほ場外で適切に処分する。



図1 発病株
(小葉の奇形)



図2 発病株



図3 発病株クラウン断面(比較)

左: 萎黄病 導管が褐変
右: 炭疽病 全体が褐変



図4 発病株根部
(褐変症状)



図5 発病株から発生した
ランナー



図6 畝に沿って発生

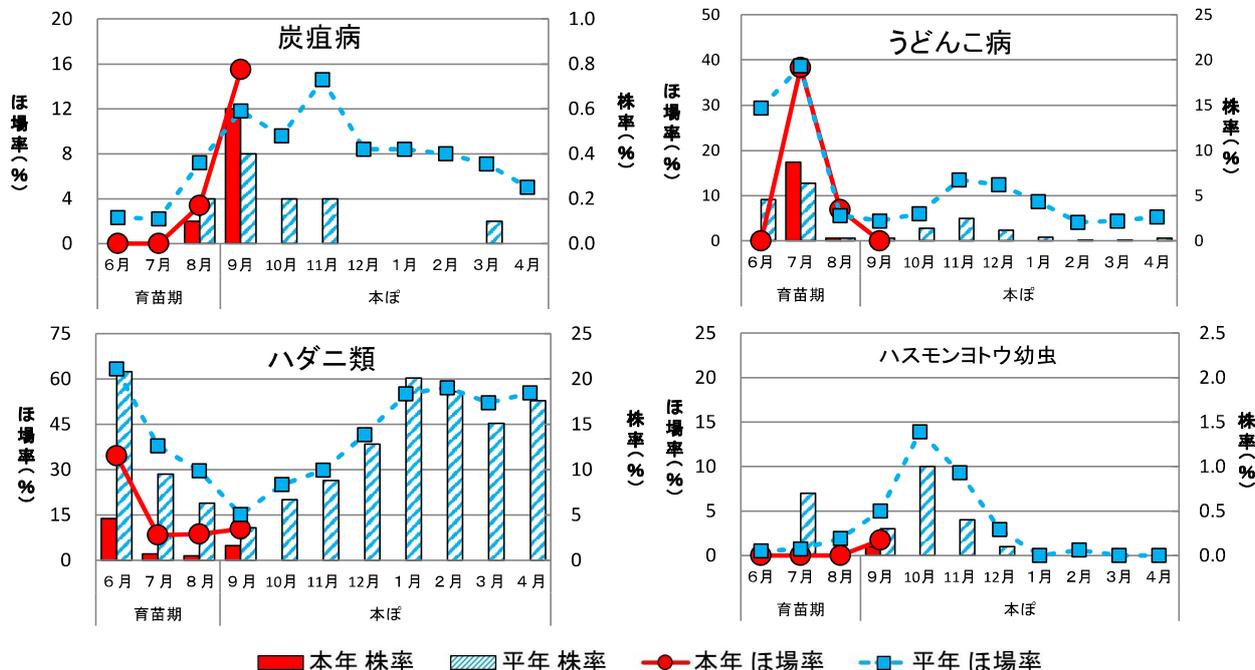


図7 激発ほ場

GAPの実践で安全・安心ないちご生産に取り組みましょう！

■ 病害虫の発生状況（育苗）

- ・炭疽病の発生は平年並みで、うどんこ病の発生は少ないです。
- ・ハダニ類の発生は平年並みで、ハスモンヨトウ幼虫の発生はやや少ないです。



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 主な病害虫の発生予想と防除対策

1 炭疽病

- (1) 発生予想 ・発生量：やや多い
- (2) 対策 ・植物体の濡れ時間が長いと感染・発病が助長されるので、かん水は午前中に行い、夕方には地上部が乾いた状態になるよう水量を調整する。
- ・発病してからの防除は困難なので、予防を主体に異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ・発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
- ・[植物防疫ニュース\(速報No.9\)](#)、[炭疽病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

2 ハダニ類

- (1) 発生予想 ・発生量：平年並
- (2) 対策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
- ・薬剤抵抗性の発達を抑制するため、気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。化学農薬を使用する場合は、系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
- ・天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。

3 ハスモンヨトウ幼虫

- (1) 発生予想 ・発生量：やや多い
- (2) 対策 ・成虫の侵入を阻止するため、開口部や出入りに防虫ネットを展張する。
- ・定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

■ 今月のトピックス さまざまな虫の卵

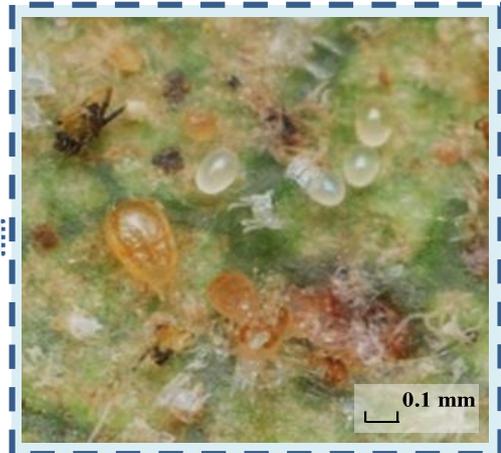
いちご栽培ほ場では、さまざまな種類の虫の卵が見られます。栽培管理上問題となる害虫と、それらを捕食する天敵について、卵の外観上の特徴を紹介します。

害虫の卵を発見した場合は早期に取り除き、被害の拡大を防ぎましょう。

(注) 各画像の縮尺は一致しませんので、大きさの比較はできません。



ハダニ類
【光沢のある球形】



カブリダニ類 (ハダニを捕食)
【光沢のあるだ円形】

【赤字：害虫】
【青字：天敵】



ハスモンヨトウ
【毛で覆われた卵塊】



オオタバコガ
【放射状の隆起線がある】



メイガ類
【うろこ状の卵塊】



クサカゲロウ類
(アブラムシなどを捕食)
【糸状の卵柄がある】



テントウムシ類
(アブラムシを捕食)
【ラグビーボール状】



ヒラタアブ類
(アブラムシを捕食)
【細かい模様がある】

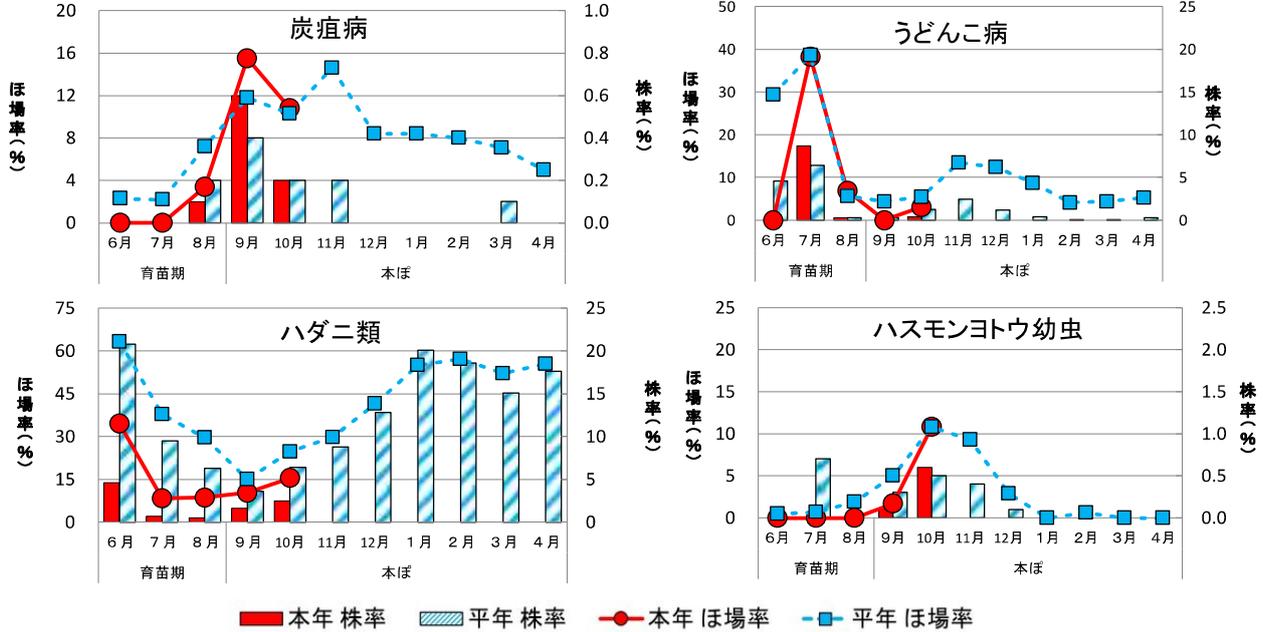
GAPの実践で安全・安心ないちご生産に取り組みましょう！

いちご病害虫情報第5号（10月）

令和3（2021）年10月22日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況

- 炭疽病の発生は平年並みで、うどんこ病の発生はやや少ないです。
- ハダニ類の発生は平年並みで、ハスモンヨトウ幼虫の発生は平年並です。



■ 主な病害虫の発生予想と防除対策

1 うどんこ病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：平年並
- (2) 対策 ・ 軟弱徒長すると発生しやすくなるので、温度管理やかん水を適切に行う。
・ ほ場を良く観察し、発生が見られたら、薬剤を葉裏によくかかるよう散布する。
・ 寒暖差による結露に注意する。

2 ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：平年並
- (2) 対策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 薬剤抵抗性の発達を抑制するため、気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。化学農薬を使用する場合は、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・ 気門封鎖剤は卵に効果が低いため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。
・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (3) 備考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果を当センターHPに掲載中。](#)

3 アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：平年並
- (2) 対策 ・ 低密度のうちにカウンター乳剤等のIGR剤を散布する。被害が大きくなる恐れがある場合には、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。
・ 10月中旬までに開花が進んでいるほ場では、秋期のアザミウマ類の飛び込みが多くなる傾向にあり、翌年春以降の発生につながるおそれがあるので、防除を徹底する。
- (3) 備考 ・ [防除のポイントNo.19を当センターHPに掲載中。](#)
・ [アザミウマ薬剤感受性検定結果①を当センターHPに掲載中。](#)
・ [アザミウマ薬剤感受性検定結果②を当センターHPに掲載中。](#)

■ 今月のトピックス ヨトウムシの見分け方

イチゴの葉を食害する蛾の幼虫は主に、ハスモンヨトウ、ヨトウガ、オオタバコガの3種類です。これらは見た目も大きさも似ているものの、適用できる農薬の種類や効果、抵抗性までもが異なっており、注意が必要です。今月は、これら3種の蛾の幼虫について効果的な防除を行うために役立つ、簡易的な識別方法を紹介します。

1. ハスモンヨトウ

毛で覆われた卵塊から生まれ、若齢のうちは集団で葉を食害します。やがて体が大きくなってくると周囲の株へと分散し、昼間は土中や地際に隠れるようになります。薬剤も効きづらくなるので、若齢の集団でいるうちに防除しましょう。

頭の後ろに1対の黒い斑紋があるのが特徴です（若齢のうちはありません）。

2. ヨトウガ

ハスモンヨトウとは異なり、卵塊は毛で覆われません。見た目はよく似ていますが、頭の後ろに黒い斑紋は現れません。また、若齢幼虫は尺取虫のような歩き方をするので、ハスモンヨトウと区別できます。

3. オオタバコガ

1粒ずつ産み付けられた卵から孵化するので、若齢のうちから単独で食害します。ヨトウムシ類とは異なり、体表面の毛が太く、毛穴が隆起するのが特徴です。

表1 特徴の一覧

害虫名	体長	見た目	歩き方	卵の形
ハスモンヨトウ	~40 mm	毛が目立たない 黒く目立つ斑紋がある	這って歩く	卵塊 毛で覆われる
ヨトウガ	~50 mm	毛が目立たない	尺取虫のよう (若齢)	卵塊
オオタバコガ	~40 mm	毛が太く目立つ 毛穴が隆起する	這って歩く	1粒ずつ

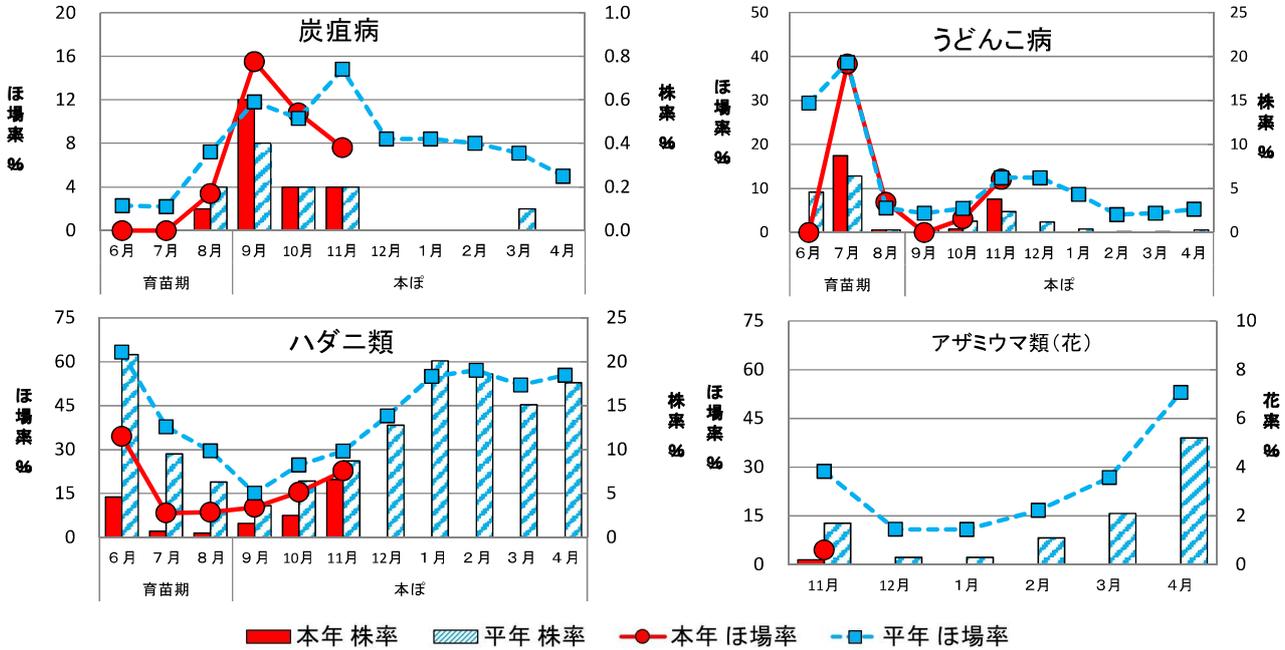


図1 (上から) ハスモンヨトウ、ヨトウガ、オオタバコガ(中~老齢)

【注】体色は緑~茶褐色まで様々です
(写真は緑系個体)

■ 病害虫の発生状況

- 炭疽病の発生はやや少なく、うどんこ病の発生は平年並みです。
- ハダニ類の発生は平年並みで、アザミウマ類の発生は少ないです。



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%) : 発生株数 / 調査ほ場数 × 25株 ※ほ場率(%) : 発生が確認されたほ場数 / 調査ほ場数

■ 主な病害虫の発生予想と防除対策

1 うどんこ病

- (1) 発生予想 ・ 発生量 : 平年並
- (2) 対策 ・ 軟弱徒長すると発生しやすくなるので、温度管理やかん水を適切に行う。
・ ほ場を良く観察し、発生が見られたら、薬剤を葉裏によくかかるよう散布する。
・ 寒暖差による結露に注意する。

2 ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量 : やや多い
- (2) 対策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 薬剤抵抗性の発達を抑制するため、気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。化学農薬を使用する場合は、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・ 気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、連続して散布すると効果が上がる。
・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (3) 備考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果を当センターHPに掲載中。](#)

3 アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量 : やや少ない
- (2) 対策 ・ 低密度のうちにミツバチや天敵への影響が少ないカウンター乳剤等のIGR剤を散布する。被害が大きくなる恐れがある場合には、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。
・ 10月中旬までに開花が進んでいるほ場では、秋期のアザミウマ類の飛び込みが多くなる傾向にあり、翌年春以降の発生につながるおそれがあるので、防除を徹底する。
- (3) 備考 ・ [防除のポイントNo.19を当センターHPに掲載中。](#)
・ [アザミウマ薬剤感受性検定結果①を当センターHPに掲載中。](#)
・ [アザミウマ薬剤感受性検定結果②を当センターHPに掲載中。](#)

■ 今月のトピックス 天敵ダニの見分け方

イチゴ栽培におけるハダニ類の対策として、天敵であるカブリダニ類が製剤化され広く利用されています。同じダニでも、カブリダニ類はハダニ類に比べてやや大きく、光沢のある体を持っています。また、脚が長く動きが速いのが特徴です。

下表に特徴をまとめましたので、天敵導入の参考にしてください。

※肉眼での観察は困難ですので、10～20倍程度のルーペを使用すると良いでしょう。

表1 ハダニ類及びカブリダニ類の特徴

種類	体色	体表面	体形	動き	卵の形
ナミハダニ	黄緑色 /赤色	光沢なし	ひし形 ～だ円形	鈍重	正円形 (球形)
カンザワハダニ	赤色				
ミヤコカブリダニ	クリーム色	光沢あり	涙形	素早い	だ円形
チリカブリダニ	オレンジ色				



図1 ナミハダニ黄緑型と卵（正円形）



図2 ナミハダニ越冬型
(注：越冬型はオレンジ色です)



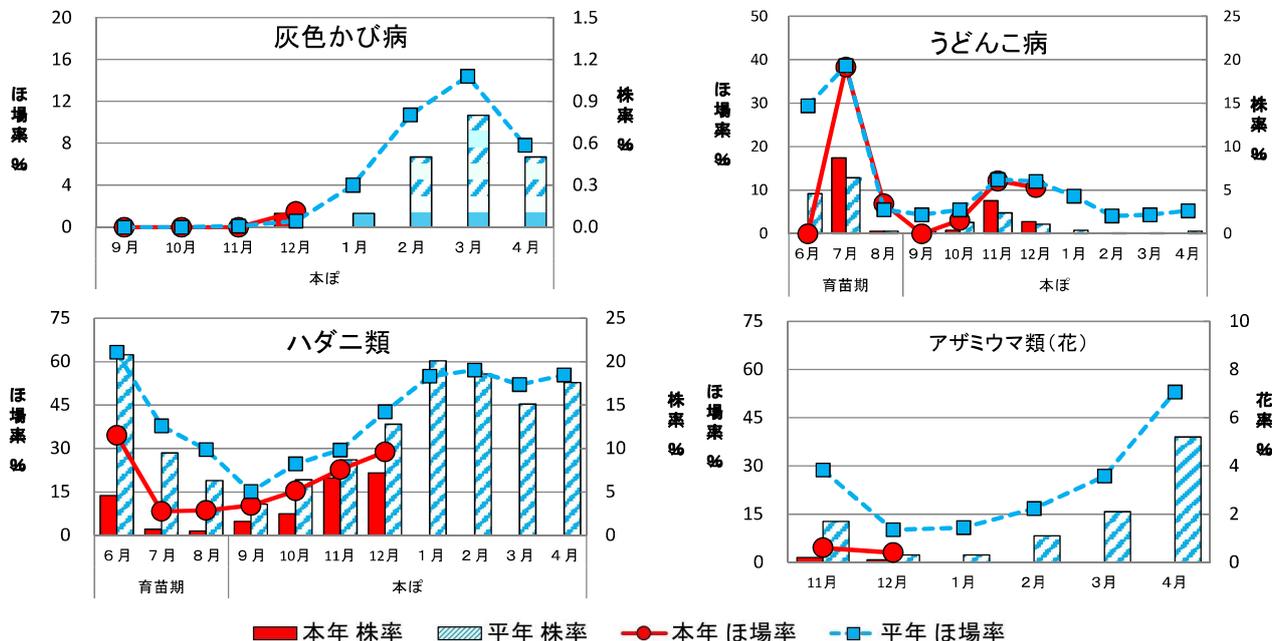
図3 チリカブリダニ



図4 ミヤコカブリダニと卵（だ円形）

■ 病害虫の発生状況

- ・ 灰色かび病の発生はやや多く、うどんこ病の発生は平年並みです。
- ・ ハダニ類の発生は平年並みで、アザミウマ類の発生はやや少ないです。



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%):発生株数/調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%):発生が確認されたほ場数/調査ほ場数

■ 主な病害虫の発生予想と防除対策

1 灰色かび病

- (1) 発生予想
- ・ 発生量：平年並
- (2) 対策
- ・ 多湿条件において発生しやすいので、下葉を除去し株元の風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
 - ・ 発病した果実等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - ・ 発生初期に、セイビアーフロアブル20等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (3) 備考
- ・ [灰色かび病薬剤感受性結果①](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。
 - ・ [灰色かび病薬剤感受性結果②](#)を当センターHPに掲載中。

2 うどんこ病

- (1) 発生予想
- ・ 発生量：やや少ない
- (2) 対策
- ・ 軟弱徒長すると発生しやすくなるので、温度管理やかん水を適切に行う。
 - ・ 発生初期のうちに、パンチョヨ T F 顆粒水和剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。
 - ・ 硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、天敵を導入した場合は長時間のくん煙処理は避ける。

3 ハダニ類

- (1) 発生予想
- ・ 発生量：平年並
- (2) 対策
- ・ 天敵導入ほ場では天敵の生育状況等をよく観察し、必要に応じて追加放飼を検討する。
 - ・ 化学農薬に対する感受性低下が著しいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
 - ・ 厳寒期の気門封鎖剤全面散布は、天敵に対して影響があるので注意する。
 - ・ 葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
- (3) 備考
- ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

■ 今月のトピックス ネグサレセンチュウ

被害症状について

ネグサレセンチュウは体長 1 mm にも満たない小さな動物です。土壌中に生息しており、植物の根に侵入して内部で増殖し、名前どおりの根腐れ症状を引き起こします。いちごでは、クルマネグサレセンチュウ（図 1）による被害が知られています。

本種がいちごの根に侵入すると、根が茶褐色に変色及び腐敗していきます（図 2）。これに伴い、地上部では葉縁が赤褐色に変色し、しだいに葉全体が紫褐色に変色していきます。多発生すると株の矮化や生育停止が起こり、最終的には萎凋枯死します。



防除対策について

ほ場では、線虫を持ち込まない・放置しない・増やさないことを徹底しましょう。

1. 健全苗の使用

育苗段階で線虫に汚染されると、本ほに線虫がいなくても被害が発生する。

親株には線虫に汚染されていない健全苗を、育苗培土には消毒されたものを使用する。

2. 土壌消毒の徹底

線虫は 60℃程度に数分さらされることで死滅する[※]。夏期の太陽熱消毒や、殺線虫剤による土壌消毒をしっかりと行い、ほ場の線虫密度を下げる。殺線虫剤を施用する場合は、土壌が過湿、乾燥のときは避け、低温のときには処理期間を長くとするようにする。

（※）より低い温度では、より時間を要する。

令和3(2021)年度病害虫発生予察特殊報第1号

令和3(2021)年7月29日
栃木県農業環境指導センター

トビイロシワアリのなすほ場での発生について

- 1 害虫名 和名：トビイロシワアリ（アリ科フタフシアリ亜科シワアリ属）
学名：*Tetramorium tsushimae* Emery, 1925
- 2 発生作物名：なす
- 3 発生経過
令和3(2021)年7月に県東地域の露地なすほ場（1ほ場）において、一部の株が萎凋又は枯死する被害が確認された（図1）。被害株の地際部にアリの寄生と食害痕が確認され、採集したアリを農林水産省横浜植物防疫所に同定依頼した結果、トビイロシワアリと同定された。
本種による農作物への被害は、これまでに福岡県、千葉県、広島県、香川県、佐賀県、長崎県、滋賀県、山口県、群馬県、茨城県、静岡県、埼玉県、長野県、新潟県、東京都、石川県、神奈川県、福島県及び高知県の19都県において、なす、トマト、キャベツ、ブロッコリー、はくさい、かんきつ、ばれいしょ、アスター、はぼたん等で報告されているが、本県における被害確認は初である。
- 4 被害の特徴（図1，2）
株元に土を盛り、地際部の表皮を食害する。茎又は花への被害も報告されている。地際部に激しい食害を受けた株は生育不良症状を示し、定植直後などの若い株では萎凋又は枯死することもある。
- 5 形態（図3，4）
成虫（働きアリ）の体長は約2.5mmで、体色は褐色から黒褐色。触角は12節。頭部及び胸部表面は縦じわに覆われる。前伸腹節後部背方に一对の歯状突起を有する。腹柄節は2節。
- 6 生態
屋久島以北の日本各地に分布し、野外においてごく普通に見られる在来種である。開けた草地の石下や草本植物の株元に営巣する。巣の規模は大きく、1つの巣に多くの女王アリを有する。
雑食性で、昆虫や植物の種子、甘露又は樹液などを摂食する。
- 7 防除対策
現時点で本種に適用のある農薬はない。
深耕、かん水等による巣の破壊や、ほ場周辺の除草などの物理的、耕種的防除に努める。



図1 ほ場被害



図2 株元の食害痕



図3 トビイロシワアリ成虫 (背面)



図4 トビイロシワアリ成虫 (側面)

詳細は、農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問合せ下さい。
 病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](https://twitter.com/tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。

令和3(2021)年度病害虫発生予察特殊報第2号

令和3(2021)年9月15日
栃木県農業環境指導センター

うめ及びももにおける *Singapora shinshana* (ヨコバイ科の一種) の発生について

1 害虫名 学名：*Singapora shinshana* (Matsumura, 1932) (和名なし)

2 発生植物名：うめ、もも

3 発生経過

令和3(2021)年8月、宇都宮市内のうめ及びももにおいて、葉が白化する被害(図1、2)が確認された。被害葉の裏面にはヨコバイ科の成幼虫及びその脱皮殻(図3、4)が認められた。被害樹からの採集個体を農林水産省横浜植物防疫所に同定依頼した結果、本県未発生のヨコバイ科の一種 *Singapora shinshana* と同定された。

4 被害の特徴

成虫、幼虫ともに葉を吸汁し、被害葉は白くカスリ状となる。食害が進行すると葉全体が白化し、落葉する。被害葉の裏面には幼虫の脱皮殻が多量に付着する。

5 形態

成虫の体長は3.0~3.5mm。体色は黄緑色(図5)、複眼は黒く、頭頂部に黒斑点を有する(図6)。

6 生態

本種の発生は中国、台湾、韓国、北朝鮮で確認されており、日本では沖縄県、和歌山県、徳島県、埼玉県、京都府、大阪府、岡山県、群馬県、滋賀県及び香川県の10府県において確認されている。本種はうめ、もも、なし、りんご、サンザシ、ポポー、ポプラ等を加害することが報告されている。

7 防除対策

現時点で本種に適用のある農薬はない。

本種の発生及び被害の早期発見に努め、被害が確認されたら速やかに寄生葉ごと除去し、適切に処分する。



図1 被害樹 (もも)



図2 被害葉表面 (うめ)

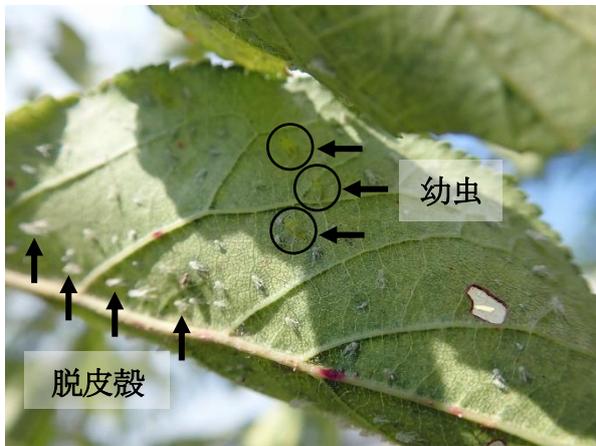


図3 被害葉裏面 (うめ)



図4 幼虫



図5 成虫

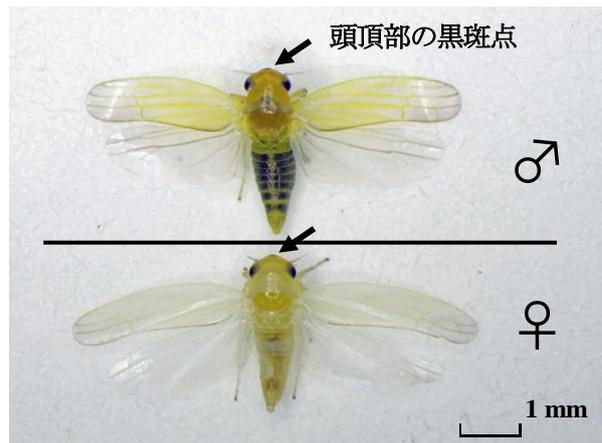


図6 成虫 (展翅)

詳細は、農業環境指導センター (TEL 028-626-3086) までお問合せ下さい。
 病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](#)」、
 農業環境指導センターホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。

令和3(2021)年度病害虫発生予察特殊報第3号

令和3(2021)年12月6日
栃木県農業環境指導センター

ミナミアオカメムシの発生について

1 害虫名 和名 ミナミアオカメムシ
学名 *Nezara viridula* (Linnaeus)

2 発生作物名：大豆

3 発生経過

令和3(2021)年11月、県南地域の大豆ほ場(2ほ場)において、本虫と疑われるカメムシ幼虫(図1)、及び成虫(図2)が確認され、栃木県農業環境指導センターにおいて形態的特徴からミナミアオカメムシと同定した。

本種は、西日本を中心に分布が拡大しており、近年では関東地方でも発生が確認され、平成22年以降、千葉県、神奈川県、東京都、埼玉県、茨城県で特殊報が発表されているが、本県における発生確認は初である。

4 被害の特徴

成幼虫ともに口針で植物の汁液を吸汁する。大豆では子実を吸汁し、着莢数の減少、変形粒及び変色粒の増加をもたらす。

5 形態

成虫の体長は12~16mm。アオクサカメムシ(図3)によく似ており、小楯板上端に3つの白い斑点があることは共通しているが、体がより縦長なこと、前胸背側角の突出が弱いこと、触角第3~5節の前半部が褐色(アオクサカメムシは黒色)であること(図4)、腹部背面(翅の下の腹板)が緑色(アオクサカメムシは基部2~4節が黒~黒褐色)であることなどで識別できる(図5)。成虫の体色は、アオクサカメムシと同様に多くの色彩変異がある(図6)。なお、4~5齢幼虫での識別は困難である(図7)。

6 生態

本種は熱帯から温帯地方南部に広く分布し、国内では本州、四国、九州、南西諸島、小笠原諸島に分布する。1~5齢幼虫を経過して成虫となり、国内では年3~4世代を経過する。成虫で越冬するが、最寒月の平均気温が5℃以下の地域では越冬できないとされている。

広食性で水稻、大豆、野菜類、果樹類等32科145種以上の植物を吸汁することが知られている。

水稻では穂を吸汁し斑点米を生じさせるが、斑点米カメムシ類の中では大型で斑点米産生能力が高いことで知られている。

7 防除対策

水稻、大豆、なすなどの果菜類、なしなどの果樹類等で被害が懸念されるため、本種を確認したほ場では、各作物においてカメムシ類に登録のある農薬で防除する。



図1 大豆子実を吸汁する幼虫（3齢）



図2 大豆葉に寄生する成虫

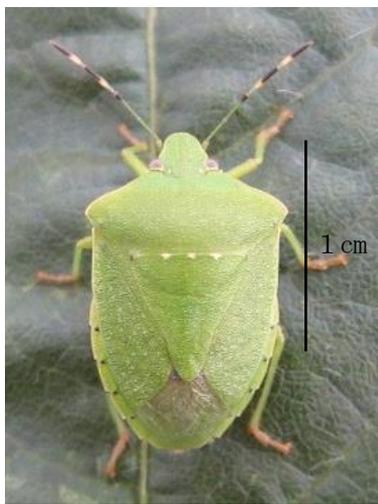


図3 アオクサカメムシ成虫
(類似する種)

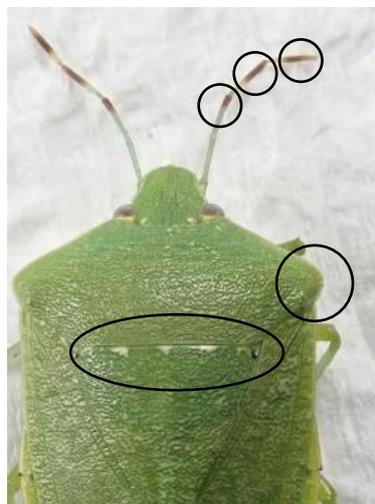


図4 成虫
(触角、前胸背側角、小楯板の斑点)

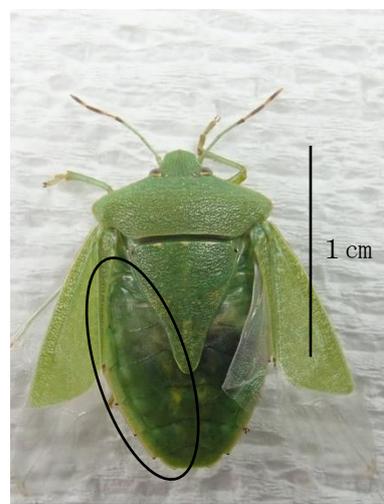


図5 成虫（腹部背面）
(円内が一様に緑色)



図6 成虫（白色帯型）



図7 4齢幼虫

詳細は、農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せ下さい。
 病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、
 農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

タマネギベと病の発生に注意しましょう

3月上旬の病害虫巡回調査で、50%のほ場でべと病の発生を確認しました。本病原菌は、土中の卵胞子によって秋～春にたまねぎに感染し（一次感染）、その後発病株に形成された分生子によって伝染を繰り返します（二次感染）。15℃前後の気温で、雨が多いと本病の発生が多くなりますが、1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は平年並であることから、今後の発生増加が懸念されます。適切に防除を行い、被害の発生を防ぎましょう。



写真1 発病株（一次感染・矢印）



写真2 発病株に形成された分生子

【防除対策】

1. 雨水が停滞すると本病が発生しやすくなるので、排水溝（明渠）の整備や排水口の点検を行う。
2. 発病株の早期発見に努める。発病株は速やかに抜き取り、ほ場外で処分する。
3. 農薬情報（表1）を参考に、薬剤防除を行う。予防を重点にジマンダイセン水和剤等を散布し、発生が見られたらホライズンドライフロアブル等を散布する。なお、薬剤耐性菌の発生を防ぐため、FRACコードを参考に異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

表1 タマネギベと病の防除に使用する主な薬剤

(令和3（2021）年3月18日現在)

農薬の名称	希釈倍数 又は使用量	使用方法	使用時期	本剤の 使用回数	成分名	FRACコード
Zボルドー	500倍	散布	-	-	塩基性硫酸銅	M1
クプロシールド	1000～2000倍	散布	-	-	塩基性硫酸銅	M1
ジマンダイセン水和剤	400～600倍	散布	収穫3日前まで	5回以内	マンゼブ	M3
ペンコゼブ水和剤	400～600倍	散布	収穫3日前まで	5回以内	マンゼブ	M3
リドミルゴールドMZ	500～1000倍	散布	収穫7日前まで	3回以内	マンゼブ・メタラキシルM	M3・4
メジャーフロアブル	2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	ピコキシストロピン	11
シグナムWDG	1500倍	散布	収穫7日前まで	3回以内	ピラクロストロピン・ボスカリド	11・7
ドーシャスフロアブル	1000倍	散布	収穫7日前まで	4回以内	シアゾファミド・TPN	21・M5
ホライズンドライフロアブル	2500倍	散布	収穫3日前まで	3回以内	シモキサニル・ファモキサドン	27・11
ナレート水和剤	800倍	散布	収穫14日前まで	3回以内	オキシソニック酸・有機銅	31・M1
カーニバル水和剤	1000倍	散布	収穫7日前まで	3回以内	ジメトモルフ・TPN	40・M5
プロポーズ顆粒水和剤	1000倍	散布	収穫7日前まで	3回以内	ベンチアパリカルブイソプロピル・TPN	40・M5
ジャストフィットフロアブル	3000倍	散布	収穫7日前まで	3回以内	フルオピコリド・ベンチアパリカルブイソプロピル	43・40
ザンプロDMフロアブル	1500～2000倍	散布	収穫7日前まで	3回以内	アメクトラジン・ジメトモルフ	45・40
	24倍 無人航空機による散布					
オロンディスウルトラSC	2000倍	散布	収穫前日まで	2回以内	オキサチアピプロリン・マンジプロバミド	49・40

注1 ドーシャスフロアブル、カーニバル水和剤及びプロポーズ顆粒水和剤はTPNを含むため、これらの剤の使用回数は合わせて6回以内となる。
 注2 プロポーズ顆粒水和剤とジャストフィットフロアブルはベンチアパリカルブイソプロピルを含むため、両剤の使用回数は合わせて3回以内となる。
 注3 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤及びリドミルゴールドMZはマンゼブを含むため、これらの使用回数は合わせて5回以内となる。

詳細は、農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。